

『ゴースト・ゴースト・ウライター』

夜。

ホテルの一室。シングル。

決して広くはない。そして、いささか古びている。

上手、手前には横長の机がこちら側に付いている。

上手奥には簡単なソファと脚の短い丸テーブル。

下手奥には、シングルベッド。片隅に小さな冷蔵庫がある。

下手脇には出入口につながる通路がある。

上手長机に三人が並んで執筆している。全員こちら側を向いている。

上手から、安孫子弘、馬場美津子、千葉真。

千葉の目の前には、原稿用紙・書類やシナリオ雑誌数冊が置かれている。

安孫子、馬場の近くにそれぞれ書き上げた原稿用紙が積まれている。

そして、馬場と千葉の間あたりに、携帯電話。

“(携帯電話・着信バイブ音)”

千葉、画面を確認し、やり過ごす。馬場も画面を確認するだけ。

着信音止まる。

千葉、執筆を止め、それまで書いていたメモを読み上げる。

千葉 時は慶応三年、大政奉還を成し遂げたばかりの坂本竜馬は、京都の近

江屋にいた。同郷の土佐藩出身・中岡慎太郎と、これから誕生する新し

い日本の行く末について、大いに語り合っていた。そして……そして、

そして……？　そして何なんだよお

馬場 え、何、それは質問？

安孫子 苦悶だろ

千葉 OK、……OK。ちよつと整理しよう

馬場 どうぞ、ご自由に

千葉 近江屋の二階に竜馬がいますう

馬場 はい

千葉 中岡慎太郎と酒飲んでますう

馬場 はい

千葉 二人を暗殺しに京都見廻隊が来ましたあ

馬場 はい

千葉 で？

馬場 は？

千葉 で、どうなの？

馬場 どうって、暗殺したりされたり、仲良くやるんじゃないの？

千葉 最終回の冒頭でこの場面やっちゃって、残りのページ、エピソード？

馬場・千葉 ……長くね？

千葉 エピソード、長くね？

安孫子 確かに、後日談が長い物語ほど冗長になりがちだ。その後の話は、説明するのではなく、想像させるように、

千葉 (遮る) だから違うんだよな

安孫子 話してる途中だぞ、君

馬場 まあまあ

千葉 うん、やっぱりそうだよ。こっちじゃないんだ

馬場 お、どした？

千葉 ここで竜馬は暗殺されずに、生き延びるんだ

馬場 お、歴史曲げるねえ！

安孫子 いや、歴史というものはいつの時代も、権力を握った者の思い通りに曲げら、

千葉 (遮る) そしてその後、

安孫子 おいつ

千葉 どのように身を隠し、名を明かさず影に徹して、秘かに活躍した様を描けばいいんだよ

馬場 お、どうやら決まりましたな

千葉 いや、でもそうしたら、この影武者はここで死ぬ……と、ん？ え、どうやって？ どうやってこの状況で身代わりになるんだ？ ……サラット？

馬場 サラット

千葉 え、サラット？ (怒)

馬場 いや、あたしは知らないよ

千葉 そこはちよつと凝っていきたいところだよ？

馬場 なんかすみません

千葉 クライマックスなんだから。痛快、かつ知的で感傷を誘うようなさあ……。ええ、難しくねえ？

安孫子 自分で基準を上げたな

馬場 安孫子さん、そういうのは「ハードルを上げた」って言うのよ

千葉 あれ、難しくなったぞ。んゝ……

安孫子 ハードル？ ああ、ハードルか……。なぜ、ハードルなんだ？

馬場 なんでって、ハードルって上げ下げして、上げると跳ぶの大変でしょ？

安孫子 うん、だったら走り高跳びのバーも同じだろう

馬場 同じだけど……同じねえ

安孫子 バーの方が、まさに超えるという感覚が直接的だと思うが

馬場 そうね。「バーを上げたな」……そうね、意味はわからないけど、そうね

安孫子 いや、違うな

馬場 違うの？

安孫子 ハードルでいいんだ。跳んだそばから次から次へと現れる超えるべき障害、その連続。きつとこの表現は、まさに人間の一生を表わしているんだ

馬場 え、そうなの？

安孫子 ああ、深い。「ハードルを上げる」……いいねえ。これで一本書けるんじゃないかな

馬場 ええ、すごい！

安孫子 (書き始める) タイトル、『走り高跳び』

馬場 え？

千葉 ああ、ダメだダメだダメだ！ もーダメだ。ダメだ、こりやー

千葉 ヤケになって手元の書類をばらまき、

長机に無造作に置かれていた紙幣をポケットに突っ込み、
下手脇通路へ去って行く。

馬場 あらら〜、進まないねえ

安孫子 決断をしないからだ。書き手の決断がなければ、登場人物だって動き出せない。そういうものだ

馬場 そうかなあ。女は決断なんかしないで、いつまでも悩んでいたいものよ

安孫子 知らん

馬場 (自分の世界へ) 世間知らずな貴族の御曹司か、心優しきパン屋の青年、さあどつち

安孫子 なんだ、それは

馬場 ああ……、どつちも好き！と、悩んでいるあたしが好き……これが女よ

安孫子 はっ

馬場 ツルツルプリンス、オア、ソフトフランスパン……Oh, I'm just a woman

安孫子 くだらん

馬場 くだらないものも世の中には必要なの〜。……どれどれ

馬場、先ほどまで千葉がいた机のエリアに寄り、

机の上や床に散乱した原稿を読み始める。

安孫子 ……馬場くん、感心しないね。人の書きかけ原稿を盗み見るのは

馬場 だって、気になるんだもの

安孫子 理由になってない

馬場 わ、全然書けてない

安孫子 馬場くん

馬場 最初の場面描写だけよ

安孫子 馬場くん

馬場 構想メモはちゃんと書けてるのに

安孫子 どれどれ(結局加わって読み始める)

馬場 あ、全六話なのね

安孫子 このメモ、随分きっちり整理して書いてるなあ

馬場 ねえ、なのになんであんなに書けないんだろ

安孫子 一話一話きっちり計算しているだろうに、何を最後の最後で……

馬場 ひよつとして、恋？

安孫子 (無視して読む)

馬場 登場人物ではなく、彼自身がまさに今、悩める恋の真ただ中にいて、

安孫子 馬場くん

馬場 ラブ？(返事)

安孫子 二つ気づいたことがある

馬場 ほお

安孫子 まず、この構想メモ、読める限りで判断するに、最終話だけないよ
うだ

馬場 最終話だけ？

安孫子 そして、彼の書いていた原稿を見たところ、この構想メモを書いた
人間と、筆跡が違う

馬場 え？

”(ノック音) “

安孫子 ん？

馬場 ルームサービス？

安孫子 頼んでないだろ

馬場 ルーム、セルフサービス？

安孫子 なんだそれは？

馬場 さあ？

”(ノック音・強め) “

安孫子 怒っているな

馬場 いいえ、愛情ゆえの強めのノック、あたしはそう感じるわ

安孫子 愛情ゆえの、強めのノック……

馬場 (自分の世界へ) そう、私はあなたの心のドアを開けることなんてで
きない。ああ、できない。私にできること、それはノックだけ

”(ノック音) “

馬場 気づいてほしい、私のささやかな勇気を振り絞った行動を。トントン。
このドアを開けてほしい。トントン。本当は開かないことを知っている
私。トントン。でも、開かないからといって、私の内に秘められたあな
たへの思いは、

“ガチャ”

安孫子 開いたぞ

馬場 開いたわね

安孫子 あいつ、鍵は？

馬場 鍵？あ、ここにある

安孫子 不用心な

堂本（声） 千葉さん？

下手奥通路より、堂本文香が入って来る。

堂本 千葉さ……ああ……

堂本と安孫子・馬場、向き合う。

堂本 トイレ……？

堂本、下手奥通路へ去って行く。

安孫子 あいつ、千葉って言うんだな

馬場 千葉ちゃんかあ

堂本、下手奥通路より帰って来る。

堂本 ……逃げやがったか？

馬場 え、逃げたの？

安孫子 さあ

堂本、千葉が座っていたイスへ手を伸ばし、座面を触る。
近くにいた馬場がよける。

馬場 おととつと

堂本 ……まだ、ぬくい。そう遠くへは行っていないはず

馬場 え、この人、デカ？

安孫子 いや、赤穂浪士だ

” (電話着信音) ”

堂本 あ…… (出る) はい、もしもし……いえ、まだ書けてません。という
か、……あ

堂本、机の上に千葉の財布と携帯電話を見つけ、拾い上げる。

堂本 いや、何でもありません。……はい、それはわかっていますが、ただ、彼
ももう限界なんじゃないか、と……ええ、でも最後の最後で手がかりが
ないので何とも……いやあ、藤本先生のシナリオをチャチャツとは……
わかってます。ですので、カンヅメにして……、あ、あと専門家の先生
をお呼びして、いろんな角度から検討してみようかと思っただけ……
大丈夫です。そこから情報が漏れることはまずないですから……ええ、
それは確かに

” ガチャ ”

堂本 あ……すみません。では、のちほど、またご連絡します

馬場 お、千葉ちゃん

千葉、下手奥通路から現れる。何かウケている。
手にはコンビニ袋。

堂本 千葉さん、どこ行ってたんですか？

千葉 いや、ちよつとコンビニ（笑）

堂本 （袋の中を見て）……ジャツキー・カルパス。こんなのわざわざ買
に行くものじゃ……まさか、一杯やろうとしてます？

千葉 違う違う、そんなんじゃないの。いや、本当はさ、フライドチキンが
よかつただけど、今ちよつど揚げている最中で……フッフ（笑）

安孫子 頭おかしくなったか？

馬場 きつと……恋

千葉、ポケットから小銭を出し、手前長机に置き、
ジャツキー・カルパスを上手奥丸テーブルに置く。

堂本 あの、何笑ってますか？

千葉 だって、え、ロビー通ってきたでしょ？ 見なかった？

堂本 何をですか？

千葉 あ、見えなかったんだ！ それもウケる（笑）

堂本 ……何の話ですか？

千葉 いやね、ロビーのソファにおじいさんが座ってたんだけど、……ソフ

アの柄とスーツの柄が、全く一緒なの。がはははは（笑） 「擬態する

老人」（笑・自分でウケる）

堂本 ……え、そんな人いました？

千葉 （笑）見えなかったんだあ、擬態成功！

堂本 台本は？

千葉 まだです……

安孫子、馬場、上手奥丸テーブルのジャツキー・カルパスを眺める。

堂本 （ため息）外出するにしても、鍵くらいかけてください。不用心にも
ほどがある

千葉 あい

堂本 それから、携帯も持って下さいよ。連絡取れないと困りますから

千葉 あい

堂本 逃げたかと思いました

千葉 逃げていいの？
堂本 いいワケないでしょ
千葉 だよねえ
堂本 書けませんか
千葉 書けないねえ。メモも隅から隅まで見たけど、ないしねえ（床のメモを拾い集める）
堂本 そうですか……（一緒に拾い集める）
安孫子 お、メモの話だな
馬場 この娘が書いたの？
安孫子 いや、違うだろう。あの字はだいぶ老け込んでいた
馬場 字って老けるの？
安孫子 （間髪入れず）ああ
堂本 ここまで書いてきた勢いで書けないもんですかね？
千葉 勢い……、勢いはさあ、もうとつくにないじゃん。わかってるでしょ……まあ
千葉 何とかここまで持ってきたけど、って感じだもの
堂本 頑張りましたよ。あともう一回じゃないですか
千葉 そうだけどさあ、最後だから、クライマックスだからこそ、ビシッと決めなきゃいけないワケで、
堂本 いや、もうここはクライマックスを特別意識しないで、ゆるゆるとと終わらせてみるのも
千葉・安孫子・馬場 ダメダメ、ダメだよ、ダメダメ、それは（など、口々にセリフを言い、堂本を囲む）
堂本 ……ダメですか？
千葉 ダメだよ、最後なもの
堂本 ……なんだろう、何か圧迫感が
千葉 え、何の話？
安孫子 何の話だ？
馬場 何の話よ？
堂本 ……いえ、何でもないです
千葉 ゴーストの限界
堂本 え

千葉 ……結局は本人じゃないんだから、作品を仕上げることはできないんだよ。これまで何とかつなげてきたので、もう精一杯……

安孫子 馬場くん（千葉を凝視）

馬場 （堂本を見ている）Cカップ（指差し）

安孫子 馬場くん……

馬場 ん、なに？

安孫子 今、何て言った？（千葉を凝視）

馬場 え……「Cカップ」？

安孫子 そうじゃない。彼だ、彼

馬場 千葉ちゃん？……Aカップ？

安孫子 違うっ。彼、今「ゴースト」と言ったか？

馬場 うん、「ゴーストの限界」って言ったわね

安孫子 どういう意味だ？

馬場 ……ゴーストライターかな

安孫子 ライターの話はいい。「ゴースト」は「幽霊」だったな

馬場 ええ、「ゴースト」はまあ

安孫子 彼も幽霊なのか？

馬場 安孫子さん？

堂本 竜馬は……どう、なるんでしょうねえ……？

千葉 ……ん、それねえ、考えたんだけどさあ

堂本 はい

安孫子 え、彼、幽霊？

千葉 すぐ暗殺されて、すぐエピソードじゃ保ちやしないんだよね

馬場 いや、違うの、ゴーストライター

安孫子 だからライターの話は今はいいっ

堂本 それはそうですね

馬場 違うの

安孫子 何がだっ

馬場 ああ、もうっ。お互い会話のジャマ！こっち！

馬場、安孫子を連れて下手奥通路へ去る。